

— Report —

COVID-19 流行下での妊娠・出産の変容と困難— 大学病院で出産した人への縦断的インタビュー調査をもとに

中本剛二

Changes and Difficulties in Pregnancy and Childbirth under the COVID-19 Epidemic : Based on a longitudinal interview study of people who gave birth at a university hospital.

Goji NAKAMOTO

Division of Health Science Graduate School of Medicine, Osaka University

(Received November 11, 2021 ; Accepted December 28, 2021)

Abstract A purpose of this paper is to elucidate unique experiences of pregnancy, childbirth, and childrearing through interviews, and explain how these experiences were affected and transformed during the COVID-19 epidemic and how pregnant women and their families responded. In particular, I will review the above experiences of 16 interviewees, and then follow the process of shaping their experiences of pregnancy, childbirth, and child rearing in relation to their surroundings, including the effects of the epidemic, through five interviews with one interviewee over a one-year period from pregnancy to an about six-month postpartum. I will also point out that a qualitative research such as ethnography and interview surveys can play a role in mediating scenes from specific perspectives to those who cannot see them, in situations with asymmetry and oppression, such as child rearing situations.

Key words — Interview Survey, Narrative, Environment, corona disaster, mediation

1. はじめに

本論の目的は、インタビュー調査から妊娠・出産・育児にまつわる特有の経験を明らかにするとともに、それらが新型コロナウイルスの流行下においてどのような影響を受け、また変容したかということ、さらには妊産婦や家族はどのように対応したかということを記述し、明らかにすることである。

本論の研究を含むプロジェクト¹⁾ではパーソナル・ライフ・レコードなど量的データの取得および解析が中心であるが、それらと並行して、筆者は研究参加者の一部に、質的な研究として縦断的なインタビューを行い、特に育児困難を理解するうえで関係する現在の人的、物理的な環境、妊娠が判明してからの医療機関受診の経緯、医療従

事者との関係やコミュニケーションについての感じ方、出産や育児について困難と感じていること、今後の子育てについての環境（手助けをしてくれる人がいるか、など）について聞き取りを行ってきた。そして当事者の視点からそれら周囲との関係性や環境、出来事などがどのように選ばれ、関係づけられたり、理解されたりしているかを検討・分析するナラティブ・アプローチを行ってきた²⁾。

ところで、インタビュー調査は2020年1月から開始したが、その後の過程は図らずも新型コロナウイルスが発生し、感染拡大と一時的な収束を繰り返す時期と重なることとなった。そのため、聞き取りからは妊娠期、出産時、育児期とそれぞれの時期に特有の経験に加え、新型コロナウイルスの流行による社会環境の変化やそれに伴う不安が大きく影響していると感じられた。さらには、

出産し子育てするときの社会・文化的環境や規範にも目を向けなければならないと考えられた。例えば、アーサー・クラインマンはナラティブ形成の際に医療者、患者といったそれぞれの立場で理解の基盤となる「説明モデル」があり、それは「患者や家族や治療者がある特定の病のエピソードについて抱く考え」³⁾であり、それは社会や文化集団での病気についての信念を含んでいるとする⁴⁾。また、特定の身体症状の経験の在り方について、マーガレット・ロックは、膨大なインタビュー結果をもとに、北米との比較の上で日本において更年期という、バイオメディスンによって定義される身体症状の経験のあり方について、日本社会のジェンダー規範や家父長制的な家制度が大きく影響していることを明らかにしているが⁵⁾、子育てにも、それに加えて新型コロナウイルス流行をめぐる経験にも、社会や家族、子育てにまつわる関係性や規範、資源の在り方が大きく反映されると考えられる。

本論では、上記インタビュー内容から、妊娠・出産期の妊産婦の経験について、それぞれ個別の状況を明らかにするとともに、特に新型コロナウイルスの流行による様々な状況と関連するものについて報告し、コロナ禍の状況で妊産婦が直面した文化・社会変容と困難さ（あるいは容易さ）の一端について明らかにする。その際に確認できるのは、同時代を生きた人にとっては当たり前と感じられるような、コロナ禍における個別の現象や社会変容が、妊娠・出産・育児という一連の状況の中で、どのように影響し、またどのように妊産婦や家族は対応したのか、あるいはできなかったのか、ということであると考えている。

そしてそのような経験を踏まえたうえで、これら変容にともなう困難や分断の中で質的研究が担うべき役割についても指摘する。

2. 方法

半構造化インタビューを、各対象者に対しおおむね3か月に1度縦断的に行った⁶⁾。妊娠期及び産後1か月までは基本的に大阪大学医学部附属病

院（以下、阪大病院）において対面でのインタビューを行い、その後は阪大病院における受診機会がある場合を除きZoom等のweb会議システムを利用してインタビューを行った。2021年10月時点で16人の妊産婦にインタビューを行っている⁷⁾。期間は同じく2021年10月時点において、最も長期間にわたるケースで妊娠後期から産後約1年8ヶ月（期間にして約2年）に至っている。

本論においては特に、縦断的なインタビューを行ったため妊娠・出産から乳幼児を育児する経験まで経時的に把握することが可能となったと同時に、コロナ禍において、状況が刻々と変化するそれぞれの時期における経験について聞き取りを行うことができた。また、大学病院である性格上、受診者の居住地は一般の病院より広範囲にわたっていると考えられる。今回の対象者は大阪府を中心とする近畿圏内を中心であるが、その中でも地域的な特徴も表れていた。

本論では、上記16名へのインタビューにおいて聞き取ることができた育児困難などの経験を簡単に紹介したうえで、2021年10月時点で、妊娠中から産後1年を経過するまで継続してインタビューを行っている1名の方について経時的にその経験を追い、家族環境、援助の体制、居住地、妊娠中や出産時、および育児中の母親本人や児の健康状態など個別の様相を確認しながら当事者の経験を報告し、それらとコロナ禍の影響についても考察を行う。

3. インタビュー調査から

(1) 聞き取り結果の概要

上記16名についてのインタビューでは、普段の生活が、また妊娠・出産期に特有の経験がそれぞれの個別の生活上の文脈で語られるとともに、特にコロナ禍の影響が何らかの形で見られるものとなった。

勤務形態等の変化では、妊婦本人や夫がテレワークの体制となったという話も多かったが、それらが妊娠期・出産期に家事や育児を分担できる体制としてプラスにとらえられている場合もあれ

ば、妻（妊産婦）の側の家事負担が増加したとしてマイナスにとらえられる場合もあった。すでに子供がいる家庭の場合には、一斉休校や保育の停止で子供が家にいる状態は家事・育児負担の増加としてとらえられる傾向があった。

医療との関連では、まず通院の際に公共交通機関を使用することに関する困難や不安が聞かれた。それは体力的につらいという場合もあれば、コロナウイルスへの感染を不安視する場合もあった。自家用車を妊婦自ら運転して通院している場合もあったが、妊娠後期になると自らの運転はできるだけ控えた方が望ましいとされるため、どのようにすればよいか迷っているというケースもあった。また自らが自動車を運転しない場合には、親の援助を得て通院するなど様々な工夫がみられた。夫が車を運転して送り迎えする場合も複数見られたが、その場合夫の仕事の都合が大きく影響するようであった。

病院内部では、混み合った病院に来て、診察を受ける場合の感染の不安も聞かれた。もちろん阪大病院では他の施設と同様か、それ以上に対策が行われており、密を避ける、換気を十分にする等の措置が取られていたが、阪大病院産婦人科では2020年春の感染拡大期には、妊産婦の意向を踏まえつつ急を要さない健診等を中止する措置も見られた。

また、出産時に立ち合い分娩ができないことへの不安も聞かれた。そして面会ができないため入院中不安で必要物品の受け渡しなどにも不便を感じたという感想もあった。ただし、実際にその状況で出産してみると落ち着いて出産できた、と肯定的にとらえる場合もあった。一方で、コロナ禍の状況に対応するためのイレギュラーな病棟移動で、他の診療科の病棟に移動し、夜間に授乳のため暗い病院内を移動しなければならなくなり不便だったなどの感想もあった。

病院や自治体主催の、両親学級等のイベントが軒並み制限されたり、中止されたことへの不安も聞かれた。それは妊娠期に出産準備がしにくいだけでなく、ママ友など育児にまつわる社会関係が作れない要因と考えられていた。人間関係が作り

にくい、同世代の子供の様子がわからない、発育状況を他の子と比較し、自らの子供の相対的な位置を確認することができない、といった、これまで普通に行われていた経験の不在に関する不安も聞かれた。特に第1子の出産の場合にその傾向は顕著であった。

そして、それぞれ個々人が抱える個別の事情も大きく経験の形成に影響していた。妊娠中の胎児の疾患、両親やパートナーの病気、親の介護や世話、自らの体調などが、妊娠・出産の文脈の個性や特徴を形作っていた。

出産前後に得られる援助についてはコロナ禍の影響が色濃く出たと考えられる。報道でも里帰り出産や立ち合い出産ができなくなったり、遠方に住む家族のサポートが受けられなくなっている場合があることが報じられているが⁸⁾、インタビューの中でも里帰り出産が困難になるだけでなく、感染拡大の懸念や自粛要請等で移動が困難になる中で、親に出産前後に自宅に来てもらい、助けてもらうことも断念した場合もあった。

さて、上記のような妊娠・出産・育児期の経験に関連する要素は、それぞれ多くの人に共通する場合もあるが、個人の、あるいは特定の状況に特有のものもあるだろう。それらがどの程度一般的であるかを知るためにはアンケート等の量的な調査が計画される必要があるかもしれない。しかし同様に重要なのは、それら要素が個人の生活の文脈の上でどのように影響しあい、どのように経験が形成されていくのか、ということであろう。特に今回、コロナ禍の元での社会状況は文脈を形成する大きな一つの要素となる。そのため、本稿では一人のインタビュー対象者の経験を時系列にそって確認することにより、コロナ禍の影響も含めた経験の形成過程について確認していきたい。

(2) Aさんの場合

①概要

以下のインタビュー引用部分においては、読みやすいように重複を省略したり、語尾等を改めたりした部分もある。またプライバシーにかかわる固有名詞等は記号により伏字にし、カッコ内に解

説を加えた。その他カッコ内は筆者補足である。

Aさんは研究職で、30代中頃の女性である。今回は第2子（女の子）の妊娠・出産で、第1子は2歳上の男の子である。2020年6月に出産されたが、インタビューは妊娠中に2度（2020年2月、4月、）出産後に5度（2020年7月、9月、12月、2021年3月、7月）行っている。今回は紙幅の関係により、2020年2月から2020年12月までの5回のインタビューをもとにその経験を考察する。

② 2020年2月

最初のインタビューである2020年2月の段階ではまだコロナウイルス流行の影響は顕著ではなかった。Aさんは2002年2月の段階で、仕事と妊娠・出産の両立の困難について語ってくれた。

（筆者から困っていること、不安なことを問い、Aさんから上の子も含めての話か、社会的な問題でもいいか、体の問題についてか、と確認されたのちに）

中本：一番困ってることから。

Aさん：一番困るといふか、ちょっとおなかを隠しながら仕事をするのが大変なのと、たとえばファンドの面接とかに行くときに、

（中略）

Aさん：ファンドのときの面接とかで、普通の職業の方でも、何か大事な会議とかでもそうかなと思うんですけど、おなか大きいと仕事できるのかな、と思われたくないんで隠して行くんですけど、そうするとおなかに負担がかかって、あとからおなか張って苦しい、とか。

（中略）

Aさん：たとえばファンドだったら、来年度から始まるファンドで、いかにも産んだあと仕事できなさそうだからって言って、面接で落とされないかな、とか。

中本：そうか、そうか。そういう不安もありますもんね。

Aさん：あとはお客さんとかが来て一緒にお仕事するって話になったときに、おなかが大きいと責任持ってやってくれるのかなって思われたらちょっと、と思うんで、わざとちょっと隠して行っちゃったりとか。そうするとそれなりの振る舞いをしなきゃいけないんで、ちょっとおなかとかさすったりとかできないんで、堂々としてしなきゃいけないんで、あとからちょっと苦しいとか、そういう。

中本：実際にそういう雰囲気とかって感じられたことってありますか。

Aさん：むしろどちらかと言うと、（妊娠していると）言ったほうが皆さん、優しくしてくださいるんで。でも初めてのお客さんとか、初めての先生の前とかだとすると、ちょっと隠したほうがいいかと思っちゃうんですけど、ただもう知ってる人だったら、わりと意外と受け入れてくれるもんだと。

（中略）

Aさん：じゃあ、その話の続きで言うと、全然知らない人の前だと隠しちゃうんですけど、たとえばいま私がやってるプロジェクトで、〇〇（機構名）のプロジェクトをやるんですけど、一つのプロジェクト期間内に、実は2人子どもを産むことになりまして。普通はそういうのを避けるというか、だけどちょっとあつかましいかなと自分でも思うんですけど、でも皆さんが、先生たちが、おなかを気を付けながら頑張ってるねとか言ってくださったり、あと延長する制度とかがすごく行き届いてて、出産の前と後で休職というか、ファンドを止めてくれたりしてるので。だから2人目ももう、ちょっとプロジェクト期間内だけじゃおうかなと思って。つい先週、出張があって、そのことを言ったんですけど、皆さんすごい、おめでとうって言ってくれて。

（中略）

Aさん：会議中もブランケット持ってきてくれたりとか、ちょっと休んでいいよとか言ってくれて、それを誰もマイナスに受け止めな

くて心配してくれるので、意外と思ってるよりみんな優しいなっていう感じです。

中本：知ってる人というか、もういままで一緒に仕事してきた方だとそういう雰囲気が強かったかなということですね。やっぱりでも、初めての人の場合は気を遣っちゃうかなということですかね。

Aさん：そうですね。ただ、あとはその制度がもう行き届いているという安心なので、それで、たとえば〇〇（機関名）のだと、ほかの女性の方々が休みながらやって、それを奨励しているような雰囲気が出てるので、組織から、それでかなりやりやすいとか。

Aさんはこの時点で、研究職としてファンドなど研究資金を取りに行くが、妊娠しているとハンデになるので、審査する側やほかの研究者にそれを隠さなければならないと思っている。ただし実際には現在従事しているプロジェクトで妊娠していることを公表すると、これまで一緒にやってきた周りの人がみな暖かく受け止めてくれたことを述べている。

職場と病院の近接性も大切な要素となっている。支援を得るためには里帰り出産のほうが得策のようにも思えるが、Aさんの場合は病院との近接性や仕事が継続できることが大切だったという。

中本：診察とかどうですか。病院関係はそんなに負担ではないですか。あと、先生の言うことがわからないとか（笑）、大丈夫ですか。

Aさん：（病院が）近いので、近くから来るので、いまというよりはどっちかという、出産当日のことを考えるとすごく安心で、それこそ家にいるよりこっちの、職場のほうが近いので、そういう意味では怖くないというか。

中本：そうか、そうか。職場にいても大丈夫っていう。

Aさん：はい。何かあったらそのまま、おなか痛くなったら歩いてここに来たら産める

（笑）みたいながあるので。あとは前回、里帰り出産したんですけど、ちょっと家族というか、みんなに気を遣っちゃったんで、それに、仕事と切り離されちゃうんで、里帰りすると、そうすると自分が何者かわからなくなってつらかったの。そういう意味でも、もう陣痛がくる直前まで仕事してるほうが、私は嬉しい。

中本：（前は）もうだいぶ、もうパツと早めに切るといえるか、仕事を一応休む形にして行かれましたか。

Aさん：飛行機でしか帰れなかったの、（飛行機に）乗れる期間ギリギリで行ったんですけど、それに里帰りって受け入れられるギリギリの期間っていうのがあったので、それで一カ月ぐらい前にもう行ったんですけど、家で一応ずっと、休職はしてるけど、無給だけど研究は自分でしてたんですけど、でも仕事と関係ない人しか家族いないから、頑張ってもなんか自分が頑張ってることを誰も認めてくれないというか、なんかよくわかんないんですけど。出産したあともその精神的苦痛は続いたんですけど、子どもを育ててる自分と仕事をしてる自分がどうしても融合できなくて、もう何もかもやめたいみたいな、（中略）。

中本：メンタル的につらかった部分が。

Aさん：メンタルにかなりきてて、そのときはたまたま大学の産業医の先生に、ちょっとヤバいんじゃないって言われてて、カウンセラーの人を紹介してもらって治ったんですけど、なので、必ずしも仕事と出産を切り離しすぎると、あとで戻れなくなるという、というのがちょっと。

中本：子育てしつつも仕事に何割かは意識を向けておきたいとか。

Aさん：ちょっとそれが私の中でも答えがないんですけど。ただ、それと同時に、前回入院してる最中に、仕事のメールとかいっぱい来るのがつらくて。普通の会社だったら、普通の人では当てはまらない話かもしれないんですけど、自分が休職してることを誰も知ら

ない状態で仕事に来るんで、会社員の人だったら仕事は会社しか来ないから、休んだら仕事は来ないのかなと思って、

中本：そうですね。たぶんメールのチェックとかも、仕事の時間内だけですよ。

Aさん：そうですね。出勤しなかったら仕事しなくていいんですよ。だから、

中本：ああ、それが。全然、周りの方、ご存じないような状態だったんですか。そうか。

Aさん：たとえばほかの研究機関の先生から講演頼まれるとかちょっと無理みたいな、査読頼まれるとか。

中本：ああ、なるほど。学会関係とか。

Aさん：それにやっぱり、出産するの不利だと思ってたんで、隠さなきゃ、ってずっと思ってたんで、学会の人とかにはあんまり（周知しないようにしていた）。そうするとやっぱり仕事が降ってくるので、出産自身をマイナスに思う人はいないのはわかるんですけど、いま現在に戦力になるか、ならないかっていう判断ではやっぱりならないっていうほうになっちゃうと思うので、それで隠すと、で、隠してしまうと無理をしなきゃいけないっていう、そのへんの弊害が。

中本：そこがジレンマみたいな形になってしまう。

Aさん：そうですね、はい。それはもう研究者じゃなくてもバリバリ働いてる女性はたぶん、会社でいつカミングアウトするかとか悩むのかなとか、出世とかのコースから外れるとか心配するのかなと思うんですけど。

中本：難しいですね（笑）。逆にバリバリ仕事されてるからあれなんですよ。

Aさん：確かに一言で言うなら、産休の、離脱と復帰のまた戻る、その精神的なと物理的に移行するというのがけっこう難しいなと思って、ほかの女性はどうしてるのかなってむしろ興味が。

中本：切り替えというか。

Aさん：はい。

中本：難しいですよ。そうですね、今日か

らバツとか無理でもんね。

Aさん：そうですね。それに仕事できないって、ちょっと割り切ったりもしなきゃいけないなと思って。

中本：体調の問題も、もちろんありますもんね。

Aさん：はい。それに焦って仕事に復帰しなきゃと思うと、逆に全然できないので。子育てとかしてると絶対仕事にならないから、つらくてつらくてしょうがないとか。

前回の出産は里帰り出産で、周囲の人に仕事と子育ての両立について理解が得られなくてつらい思いをしたが、今回は職場と出産する病院が近接しているので安心であること、出産直前まで仕事をするつもりであり、それが叶う環境であることなどが述べられる。しかしながら、周囲の評価を考えると妊娠・出産を公言することも難しく、また仕事と子育てを切り離すことが難しいと感じ、入院中に仕事のメールが来るのがとてもつらかったことなどが語られている。

このような子育てしながらの仕事のパフォーマンスには限界があること、仕事はしたいが、周囲から仕事ができる、任せられる存在として見られるためには妊娠していることや出産したことをなかなか表に出しづらいこと、それゆえジレンマが引き起こされてしまうことが感じられている。

また、主に仕事との関係で、夫が子育てにかかわりにくい状況についても語られる。

中本：保育園は、前のお子さんのときはもうわりと早く入れた？

Aさん：はい、入れたんですけど、1カ月ぐらいで入れたんで。ほんと二カ月ちょっとで復帰しなきゃいけないって、保育園もなかなか。

中本：入れなくて。

Aさん：入れなくて。制度とか、この〇〇（現在の職場）は保育園があるのですごく充実してると思うんですけど、なかなかそういう保育園に入れないのと、あと入っても預かってくれる時間帯が0歳はちょっと短いとか。あ

とは風邪ひいたとか、すぐ帰ってきちゃう。

中本：熱出したりとかありますもんね。僕もありました。迎えに行ったりしてました。

Aさん：思い出しました。あと男女という意味で、夫が（中略）〇〇（役職名）なんですけど、そうすると仕事が、（どうしても抜けれない）会議とかがあって。普通、夫自身は協力的ではあるんですけど、ただ妻が休んでも別に夫は働けるという前提があるので。

中本：だからちょっと期待できないという感じですか。ご主人に、たとえば手伝ってほしいとか（言えない）。

Aさん：なんて言うんですか、うまく言えないんですけど、これはでも〇〇（現在の職場）に来る前の研究機関でそうだったんですけど、その前は〇〇（地名）にいたんですけど、私が産休で出産しても、別に夫が出産するわけじゃないから、夫は仕事を常に振られているみたいな。うまく言えないんですけど、夫自身は（子育てを）手伝うつもりでも、ほかの人もそうだと思うんですけど、奥さんが子どもを産んだって聞いても、別に仕事は減らないというか。

中本：そうですね。

Aさん：たとえばすごい簡単な例だと、試験業務とかのときに、たとえば私は免除されても夫は免除されないとか、そういう。委員の仕事とか。

中本：つまり夫の側の産休というか、夫の側への、子どもが生まれたことへの配慮みたいなものが、一般に社会でないんじゃないかということですね。

Aさん：配慮がないというか、はい。そんな感じで。

中本：とくに研究機関はなかった。

Aさん：はい。それに自分の裁量で働いてるんで、自分の研究の時間を削って子育てするから、そういう意味ではあれなんですけど、大事な面接とか会議とかは、夫のほうは子どもが熱を出したって言って休むわけにはいか

ないんじゃないかなとか。その男女差があるのかなとか、そんな感じですかね。

Aさんの環境下では、夫（男性）に対しては、たとえ子供が生まれても仕事上での配慮はほとんどないと感じられている。また、夫と妻の間での役割分担の妥当性についても語られる。

Aさん：あとは熱を出したら私が必ず迎えに行くけど、別に夫が迎えに行くと、私が仕事をしてもいいじゃんと思うとか。

中本：（迎えに行くのは）必ず妻の側と。

Aさん：はい。

中本：そうですね、「私」ということですね。

Aさん：はい。

中本：誰が決めたんでしょうね、これね。妻が行くっていうのをね（笑）。

Aさん：夫がどんなに協力的でも仕事としてとか、夫のほうの仕事がいっぱいあるんで、それもあってというのものもあるかもしれないですけど。

中本：仕事がどんどん（来るのが）、見てもわかるということですよ。たくさんお仕事抱えられてね。

Aさん：そうですね。そんな感じですかね。

子どもが熱を出した時に、保育園に迎えに行くという役割が必ず妻に振られることに疑問を抱きつつも、夫の職場での仕事量を考えるとやむを得ないと考えていることも窺える。

③ 2020年4月

次にインタビューを行ったのは2020年4月、妊娠後期に当たる時期である。コロナ禍の影響も語られ始める。

Aさん：コロナのおかげで会議が減って、仕事はかどると、夫が喜んでます（笑）。いま私、〇〇系（研究分野）の部門なので、〇〇の中心の先生たちがこのコロナをプラスにとらえて、テレワークとか会議とか、学会

のオンライン開催とかして、面白いなと思ってます。(中略)(近い将来は)みんな家で仕事をするのが常識になるとかなんか、そんな、なんか言っていて。コロナ自身は危険だと思うんですけど、それをきっかけにビジネスが活性化というか、無駄な会議がなくなるとか、出張しないで別にリアルタイムにインタラクティブできるとか。なんかそういうのもいいのかなと思ってちょっと、へー、と思ってます。

中本：それをプラスの方向に持っていけるかもしれない。

Aさん：そうですね、妊婦全然関係ないんですけど(笑)。でも妊婦としても別に会議とかが求められるので、遠隔の会議でいいって言ってもらえると、妊婦としても助かるので、かなり。

中本：そうですね。実際、行かなきゃいけないっていうよりはだいぶ負担が少ないですね。

Aさん：はい。なので、それを機会に、コロナが終わってからも妊婦に優しい世界がきたらいいなという感じです、はい。

2回目のインタビューでは、まず会議が減ったり、出張せずにリアルタイムでコミュニケーションが取れることが、妊娠中で体の自由が利かない場合もプラスになっていることが指摘された。

ほかにも身体的な面については以下のように言及している。

Aさん：無理がきかないのがつらくて、とくにタイムリミット、出産までのリミットがあるんで、それまでに論文書きあげなきゃと思うとすごいつらくて、おなかが張って横になったりしなきゃいけないので、何してるんだろう、自分と思うことがたまに。

中本：そのプレッシャーとかでちょっとしんどくなったり。

Aさん：ちょっとしんどいですね。

(中略)

Aさん：やっぱりおなかが大きくなればなるほど、そんなに動きも鈍くなってくるし。

また、前のインタビューに引き続き、前回の出産の経験もあり、里帰り出産しないことにし、直前まで仕事ができることがありがたいと語る。

Aさん：前のときもお話したかもしれないんですけど、今回は里帰り出産しないことにしたんですけど、里帰りとかしちゃうと社会から隔離されるので、自分が何者であるかわからなくなってつらくなるんですけど。そういう意味では、今回は出産の直前まで働いていいって職場の人たちも言ってもらってるんで、自己が保たれて、私としては、出産したあとどうなっちゃうかはわからないんですけど、前ちょっと精神的に病んじゃったので、今回うまく乗り越えたいなというのがあって。ここは職場も近いし、ものすごく助かります。

前回は話題に上った、里帰りしないことのメリット(社会から隔離されない)が、継続して実感されている。

そして産後の過ごし方も、コロナの影響もあり、親の手伝いもなくそのまま自宅で過ごすつもりであるという。

中本：(中略)ご自宅でもうずっと過ごされるという予定でした？ 今回。

Aさん：今回ですか。今回は出産したあともすぐ近くに住んでるので、普通に家にいて。

中本：とくに出産後ちょっとご実家に行かれるとかそういうことも特にしないということですね。

Aさん：しないですね。とくにコロナとかがあるので。本当はうちの実家の母に来てもらおうかと思ったんですけど、むしろ母のほうに危険なので。高齢者なので。ちょっとお手伝いはいいかなと思っていますところ。

中本：そのへん、いまは難しいところですね。

ちょっとお手伝いしてほしいなみたいな気持ちもあったりと。

Aさん：そうですね、はい。

中本：でもコロナの中でもあるので、という感じですよ。

Aさん：万が一コロナが、家で感染者が出たらよけい面倒な目にあうので、まあまあ、いいかな。

中本：いまちょっと想像すると怖いですね。もし出たときどんなふうになるのか。

Aさん：とくに私、1月に夫がインフルエンザにかかったので、子どもと、自分が妊婦なので、すごい精神的にストレスだったので、隔離して看病もしなきゃいけなかったんで、それを同じようにコロナでやるのはちょっと考えたくないですね。

中本：看病と、(子供の)お世話もされたわけですね。

Aさん：そうですね。私が食事を持って行って、手を消毒して子どもに食べさせてとかやってたので、相当きつかったんですけど、それをさらに新生児を抱えてやるのはちょっともう考えたくないの(笑)。

Aさんは少し親の援助を望みながらも、コロナ禍の下で親が遠方にいる、高齢者である、という状況では、感染の危険性も考慮すれば援助を得るのは難しいと考えている。

そして、仕事との兼ね合いについて前回からのアップデートが語られる。

Aさん：そういう意味ではすごく恵まれた時代だなというのが一つすごいあってですね。前、前回のときに、ちょっとファンドとかの研究プロジェクトとかで、妊婦であることを隠して面接に行っちゃったみたいな、あまり良くない話かもしれないですけど、そういう話だったんですけど、それが採択されてしまっていて嬉しいんですけど、その反面、何て言われるかなって怖かったんですけど、そのファンドは〇〇(機関名)だったんですけど、

初めてで、〇〇の方とお仕事するの。でも、そのときはすごい皆さんが祝福してくれて、別に隠すことじゃなかったんだというのすごく嬉しかったというのが、前回からのアップデートです。

中本：みんなが祝福してくれたっていう状況の前がしんどかったという感じですね。

Aさん：隠したほうがいいのかとか、これで足手まといとか思われたらどうしようとか思ってたんですけど、むしろけっこうすごいご年配の男性の方とかでも、素晴らしいニュースですねみたいな感じで、全然気にしないで大丈夫ですから一緒に頑張りましょう、みたいに言ってくださって。妊婦だからって行って誰も、いままで誰一人としてエツ、みたいなことを言う人が1人もいないのはすごい素晴らしい世の中だなと。

中本：その経験があったから今回だいふ、またそういうことを考えなくて済んでるという感じ。楽になる。

Aさん：そうですね、すごくありがたいなと思います。なんか言いにくいとかもあるかもしれないんですけど、男性からしたらそれってすごくタブーなことのよう気がするので、でも女性は皆さん、後ろめたく思ったり、ハンディキャップだと思ってると思うので、そういうときに男性の方がおめでととか、無理しないようにねとか言ってくださるとものすごく、かなり精神的に嬉しいし、ホッとするので、男性の方は知らないうちに女性をかなり励ましてると思います(笑)。

中本：タブーというのは、男性はそれに触れちゃダメかな、みたいな。

Aさん：という感じも。男性の方、実際のところどう思ってるかはわからないですけど、女の人ばかり優遇されて、とか思うのかなとかちょっと思うんですけど。

中本：女性から(そういう話題は)ちょっとなかなか言いにくい、難しいですか(笑)。

Aさん：難しいです。女性はでも、けっこうきついこと言う人がいるって聞いたんですけど

ど、妊娠するとエッ、みたいな（反応をする）。

中本：女性同士の中で、ですか。

Aさん：会社の邪魔になるとかそういう（ことを）、聞くんですけど、でも少なくとも、でも私の周りは本当にすごい、男性も女性もですけどすごい心配してくださるので。たまたま私が恵まれてるだけかもしれないんですけど、かなり後ろめたく思う中で、皆さんが体調とか心配してくれるのがすごく嬉しくて、なんか恵まれてるなと感じます。

前回、従事中のプロジェクトで、妊婦であることを隠さないといけないと思っていたところ、意外と暖かく迎え入れられたことを語っていたが、今回妊婦であることを伏せて獲得した新規の研究プロジェクトでも、温かく迎えられたという。さらに、妊娠していることを後ろめたく思い、また男性にとってはそのような話題に触れるところがタブーなのではないかと感じられる一方で、男性が気遣ってくれることが大きな励ましになると語ってくれた。

④ 2020年7月

3回目のインタビューは産後最初となる。2020年7月（産後約1か月）に行った。

Aさん：今回は出産の前日まで働けたのがすごく嬉しかったです。

中本：前日まで働いた。

Aさん：はい。前日というか、陣痛がきてる最中も研究室の掃除とかして、教室片付けたり、書類まとめたりしてたんで、それが嬉しいというか、おなか大きいことがまったくハンディキャップにならないというか。

中本：それは前おっしゃってた、里帰り出産せずに、という選択をしたから。

Aさん：そうですね、はい。（中略）散歩がてら〇〇（施設名）の中歩いたりとかできて楽しかったです。

中本：周りを歩いたりすることも。

Aさん：はい。陣痛が来てからずっと〇〇（施

設名）の建物の中歩いたりしてたんですけど（笑）。

中本：広いですもんね、〇〇の建物の中。

Aさん：はい。涼しいので、建物の中なので、普通のご職業だったらそんなことできないはずなんで、ちょっと恵まれてるなと本当に。

中本：そうですね、会社の中歩いて、あんまり（ないですね）（笑）。

Aさん：陣痛きてる人が会社の中歩いたら、たぶん帰らされると思うので。

中本：大丈夫って話になりますよね。なるほど、なるほど。わかりました。

これまでのインタビューの流れに沿う形で、直前まで仕事ができたととても肯定的に語られている。

入院してからの生活については、以下のように語っている。

中本：いざ入院されるとなったらどうでしたか。

Aさん：こちらの病院（阪大病院）は素晴らしいですね、とにかく。退院するときにも助産師の皆さんにお礼言ったんですけど、ホテルみたいなラグジュアリーな日々を送りまして。上の子がいないと言ったらあれなんですけど、赤ちゃんと2人だけでのんびりできて、ご飯もおいしいご飯が運ばれてくるし。

中本：ご飯おいしかったですか。

Aさん：おいしかったです。本当ですかって言われたんですけど（笑）、すごいおいしかったです。

中本：病院食って一般にあれですもんね、あんまり評判が。

Aさん：みたいですね。でも私はもう夢のようにおいしかったです。

中本：上のお子さんはどういう形にされて（ましたか）。

Aさん：上の子は夫が保育園に預けて、あと、おばあちゃんのおうちに。夫のお母さんが家にいてくれて、なのでもう私は何も考えずに、

入院中はゆっくりしてきました。もうめちゃくちゃ楽しかったです、入院中（笑）。

中本：自分のことと、その赤ちゃんのことに専念されたんですね。

Aさん：はい。もうすごいかわいくて、赤ちゃんが、（中略）とにかく睡眠が大事だになってすごい思いました。

中本：寝られる環境ということで。

Aさん：はい。前回の出産のときはもうテンパっていて全然、何日もほとんど寝てなかったんですけど、今回は休んだり昼寝したり、いろいろすごい睡眠とったら、とくに何も精神的に追いつめられることもなく。前回は涙がボロボロ出てたんですけど、今回入院中、1回も泣くことなく、とにかく楽しいし、赤ちゃんかわいいし、みたいな感じでゆっくりできて、めちゃくちゃ楽しかったです。

病院から家に帰って、しばらくの生活については以下のように語る。

中本：帰られてからはどんな感じで過ごされましたか。

Aさん：帰ったあとは夫のお母さんが手伝いに、泊りで来てくれたので、またやっぱり料亭のようなご飯がめっちゃ出てきて、私はグータラして、すごく楽しかったです（笑）。やっぱり睡眠大事だなと思ひまして、とにかく寝ることだけに専念して。

中本：身の回りのことはほぼお任せして、お母さんとかにお任せしてということですね。

Aさん：はい。私は子どもの授乳、母乳だけだったんですすごい、30分に1回とか、1時間に1回とか、けっこうきつかったんですけど、でもその赤ちゃんの授乳とお風呂入れるぐらいしかやることなかったんで。私、妊娠糖尿病で食事制限してたんで、その分ご飯が食べられることがすごく嬉しくて。

中本：あれって出産されたらもういいんですけど。

Aさん：大丈夫って言われまして。食事がと

にかく楽しくて、炭水化物がおいしくて、でもやっぱり睡眠はとるようにすごい気を付けて。うっかりとれない日があると、やっぱりちょっと異常をきたすというか、涙がボロボロ出たりとか。

中本：今回もありました？

Aさん：ちょっとありました、はい。寝られなかった日が何日か続いたら、すごいどうでもいいことが気になって、細かいところ、ちょっとヒステリックになって、なんか涙が出て、1回だけギャーって。2、3回、そういうことがあったんですけど、やっぱり寝たら治りました。

また、1か月時点、産休中での仕事との兼ね合いについて、以下のように語る。

Aさん：やっぱり仕事のメールがどんどん来るのがしんどくて、その返事とかも全然できてないというのがすごいたまってるんですけど。

中本：いまなかなかパソコン開いて、っていうところまで（いかないですか）。

Aさん：はい、ちょっとしんどいので。あとは私の持つてる研究費があるんですけど、それが使えなくなっちゃって揉めたんですけど。人を雇うつもりだったんですけど、研究員の方とかエンジニアの方を雇おうと思ったら、産休中だから。

中本：できない。

産休中であっても仕事もメールは絶え間なく送られてること、そのように仕事は止まらないのに、制度上は予算が使えないことなどの矛盾が指摘される。

コロナの影響については、以下のように語る。

Aさん：私はコロナのおかげでゆっくりできたと思ってまして。面談というか、人がとにかく来ないし、周りも外部の人がいなくて静かで、私はむしろ、ちょっと不謹慎ですけど

よかったなと思いました。

仕事の上でも来訪者がなかったり、自分が出張しなくていいのは妊娠中や入院中、育児中の負担を軽くしているという。

Aさん：（入院中は）親戚とかが来ないし、ほかの家族とかも出入りとかもないので、とにかくすごいゆったりしていて、静かで、のんびりしていて。仕事上でも夫がみんなテレビ会議なので、たとえば出産の1週間前うちの上司がやってる、〇〇（プロジェクト名）の会議があったんですけど、それ、本当は東京でやるはずだったのに、ネット会議になったおかげで私も参加できて、そういうのは絶対、おなか大きいと飛行機とか乗れないので、絶対普段だったら参加できない会議にギリギリまで参加できて、かつ誰も私がおなか大きいってわからないので、すごいいろんなプレゼンとか聞いて勉強になるけど、絶対にコロナじゃなかったら参加できなかったの。

中本：それまでは行くのが当たり前だった。

Aさん：そうですね。なのでそれは、そのときも微弱陣痛というか、ちょっとおなか痛だったんですけど、ヘッドセットして（会議に参加した）。これ、すごい次世代型だと思って（笑）。

中本：意外な効用というか。

Aさん：すごいよかったです。自分が東京とかなに行かないと参加できない会議も参加できるし、夫も夫で会議が軒並み全部なくなったので、ずっと〇〇（機関名）にいてくれるので。

中本：普段はじゃあ、もう東京に行ったりとか。

Aさん：行ったりとか、お客さんがひっきりなしに訪ねに（来てました）。

（中略）

Aさん：とりあえずそんな感じで、（中略）よかったです、という感じです。

⑤ 2020年9月

そして、4回目、産後3か月に当たる2020年9月のインタビューでは以下のように語る。

Aさん：困難を感じることで、困難というか葛藤というか、一番感じるというか考えるのが、絶対に無理だけど、子どももっとほしいなって思いますね。なかなかこれは難しいというか、働く女性の絶対、壁というか、さすがに3人は無理なんじゃないかなって言う。年齢のこともあるんですけど、仕事とかがある場合、本能なのかなと思ったんですけど、出産するってすごい、思ったよりすごく楽しいイベントだなと思ひまして。

中本：前回（第1子の時）とだいぶ考え方が違ったみたいな感じですね。

Aさん：確かにそうですね。最初はもう必死でそれどころじゃなかったんですけど、2人目産んだら、おなか大きいときも、陣痛も、叫びながら出産してる最中も全部楽しくって。そのあとも看護師さんたちがみんなチャホヤしてくれるじゃないですか、頑張ったねとか。入院してるときはおいしいもの食べて、そういうのも楽しいし、産後も楽しいし、赤ちゃんかわいいし、面白いし。ちっちゃい子ども2人を見て、楽しくって。本能なのかもしれないんですけど、なんかものすごい幸せだなと思って。本当に、もし何もそういう困難がなければ、もうたくさん子ども産んじたいっていう気持ちが理解できるというか。（中略）3人目ほしいって思ってる女性ってけっこう多いのかなって、急に思いました。

第1子の時にすごくつらかった出産と子育てが、今回の出産では周囲の環境を選び、肯定的にとらえることができたため、楽しいと思える体験に変わり、それゆえもっと子供を産みたい、子供が欲しいと思うようになったという。

意外にもAさんの場合、コロナ禍の下で、仕事上では出張・来訪の減少やテレビ会議の普及、さらに入院中も対面で人と会うことの減少によっ

てゆっくりと、子供と向き合って過ごせたことなど、メリットと感じられた部分も多く、それが体験の質を変化させた部分もあると考えられる。これは特に仕事をしながら妊娠・出産の時期を迎える人にとって、あるいは入院中の妊産婦にとって、実はこれまでの在り方（里帰り出産、実親との関係など）が負担を強いるものとなる場合もあることを逆照射しているように思われる。

病院の医療スタッフ、特に医師については、以下のように語っている。

Aさん：病院の先生ってもっとなんか、温かいですね、皆さん。とくに小児科の先生もお世話になったんですけど、どの先生方もすごい温かくって。

中本：大学病院の先生ってこんな感じだろうみたいな（ものと）、ちょっとギャップがありましたか。

Aさん：あまり大学病院って通ったことがなかったんで、いわゆる普通の。

中本：普通の、一般のクリニックと違うみたいな。

Aさん：違うような気も、独特の共通のオーラを。勝手にそういうふうに見てるだけかもしれないんですけど、すごくプラスの意味でいい感じのオーラが出てて、私はすごく阪大病院に通うの楽しかったです（笑）。

中本：いろいろお話伺うときは、大学病院ってけっこう堅いイメージがあるみたいなんですけど、それとはだいぶ違いましたっていう話はちょっと聞くことが（あります）。

Aさん：やっぱりそういうことをおっしゃるんですか。たぶんそういう。

中本：そういう感じですかね。

Aさん：はい、なんか。

（中略・大学病院が大学の経営の中心になっていることに触れたうえで、）

Aさん：そういうふうと思うんですけど、○ ○（機関名）で働いてるとやっぱり、大学病院っていうのはやっぱりすごい、大学を支える動脈というか、そういうイメージがあるん

ですけど、それにも関わらず先生方とかはもう全然。たとえばすごい極端に言うと、自分たちのお陰なんだぞ、みたいな雰囲気は全然ないと言いますか。

（中略）

Aさん：本当に余裕がありますね。患者さん、私、患者に対してすごくおおらかに接して下さって、それこそ本当に忙しいだろうに、1人1人、患者さん変わっていくだろうに、1人1人に向き合う余裕が。プロだからなのかわからないですけどすごいなと。ちょっとすごい変というか、職員として見る大学病院と、患者として見る（大学病院）っていう両面から見てるので、それがすごい興味深い。

中本：こっちから見るのと、こっちから見るのでね。

Aさん：はい、全然違う。すごいところみたいな感じと、優しい先生というそのギャップと言ったらあれですけど。すごくいいところだなと。

Aさんは大学病院というと、堅い、あるいは大学の中での稼ぎ頭で、医師をはじめ職員はとても忙しいというイメージがあるが、それに反してとても丁寧に接してもらったという印象をもっている。また、医師の説明等についても以下のように語る。

中本：どの先生がということはないんですけど、ちょっと説明の中でわかりにくかったりとか、聞きたかったけどちょっと聞けなかったとか、十分に説明が咀嚼できなかったとか、なんかそんなところありますかね。

Aさん：むしろ常に、何かありますかって、どの先生がたも聞いてくださって、もう全部出しきるまで全部聞いてくださるので、自分でも何か質問あったかなって一生懸命考えてるぐらいなので、なんか置いていかれるとかいう雰囲気は1個もないですね。

中本：なんかあったかな、ってもう1回考えるぐらいの感じですかね。

Aさん：もう絞り出して、もうこれ以上ないぐらい全部聞いてくださるという感じです。

中本：これ聞きたかったけどちょっと聞けなかったなとか、わからなかったかな、みたいな不安はとくになかったですか。

Aさん：まったくないですね。

ただし、病院の仕組みや対応については、以下のような不安を漏らしている。

Aさん：そうですね。最近、会計スキップシステムが導入されたって書いてあったんですけど、ただ妊婦健診がある人は別会計なので、また時間がかかるのでとか。コロナだし、人がすごい受付に並ぶので。

中本：それは気になりました？

Aさん：せっかく、ちょっと距離開けて並んでくださって書いてあるのに、おばあちゃんとかがすごい詰めてくるなって（笑）。詰めてる、詰めてると思って。

中本：やっぱり空けずに詰める人って多いですか。

Aさん：いますね。お年寄りの方とかけっこう詰められますね。むしろ私たちよりお年寄りの方のほうがリスクが高いから離れたほうがいいと思うんですけど。

中本：線かなんか引いてあるんですけど、あそこ、並ぶところ。あそこに、距離を開けてくださってというのは、掲示はしてますよね。

Aさん：掲示してあって、迷路みたいにこう並ぶんですけど、やっぱりあんまり気にしない人はガンガン来るんで。それがちょっといやそうな人の視線とかも、チラチラしてる人とかもいたり、その攻防が続いてる感じが。

中本：後ろを見たりとか。

Aさん：ただ、でもみんなすごいマスク、必ずしてくださってるんで全然、ここで何かに感染しそうという雰囲気は全然感じないですね。

中本：いまよりも妊婦さんのときとかのほう

が気になりましたか、そのへんのことと違って。

Aさん：どっちもですね。むしろ妊婦の（時の）ほうが気にならなくて、出産直後のときに赤ちゃんを抱っこして来たときは、もうすごい怖かったですね、1回目、最初は。生後1週間とかで来るとき、緊張しました。

阪大病院で会計が混雑することは以前からよく指摘されていたが、その場面はコロナ禍の状況においてはとりわけ新生児を連れた母親にとって、不安を感じるものとなったようである。

また、感染の拡大に伴う保育の停止と、その代替手段であるベビーシッター利用の援助制度についての困難を語っている。

（コロナ感染の拡大により、出産前に保育園の利用が制限され、上の子を預けるのを自粛した時期があり、その時には何とか夫と協力して職場や自宅で世話をしながら対応した、という説明の後、）

Aさん：そのあたりで（職場から）ベビーシッターサービスを使うことを推奨とか言われたんですけど、（中略）、ベビーシッターを使ったらお金を出します、チケットを発券しますみたいなのが来たんですけど。

（中略）

Aさん：それだけ言われてもどうやって手配するかわからないし、しかも手配するにも毎日違う人来られても怖いし、保育園だといつもの先生って、何とか先生大好きとか言ってくれるけど、いきなり券だけハイって渡されてもちょっと使えないだろうっていうのがあって、ベビーシッターの方がたとえば電車で通ってきたら、その人がコロナのリスクがあるかもしれないし、それくらいだったら保育園のほうがむしろ保護者としては安心なので。

中本：コロナ関連の心配だけじゃないですね。その人がどうか、という（相性の問題も）あるし、シッターさん自身が持ってくるり

スクミたいなのもある、ということですよ。ね。
Aさん：そうですね。無料とか、お金支援しますとだけ言われても、どう手配するかのところまでのサポートがないとわからないな、と。

中本：たとえばこのシッター、ここに電話して相談してくださいとかですよ。ね。

Aさん：そうですね。たとえば〇〇（機関名）が提携してくれてとか、別にその職場、ほかの会社勤めの方だったら会社でもいいと思うんですよ、なんかそういういつも使ってるサービスみたいなのがあれば、そこに提携できるかなと思うんですけど、無料券だけ渡されてもちょっとというのとか、学会でも1回、そういうことがあったので、託児所サービスがあるときは使えるらしいんですけど、1回使おうとしたら、ベビーシッターを雇って、こっちで個人的に雇ったぶんの後払いします、みたいに言われて、それもわかんないし怖いんで、結局頼まなかったということがあって、別に全部、0から100までやってほしいっていうわけじゃないんですけど、券だけ渡すからあとやってと言われると逆に、まあ、いっかなみたいになっちゃって使えないという感じですかね。

仕事を続けるには子供の保育が必須であるが、今回のコロナ禍の下、しばしば保育の受け入れ自体が制限された。その代替手段としてベビーシッターの活用が推奨されたが、利用者の視点からすると不便で、コロナに関連するリスクも、そうでないリスクも保育園に比べて高く、利用しにくいものと感じられている。

⑥ 2020年12月

2020年12月には子供は6か月になり、よく動くようになったことを語った後に、以下のように語る。

中本：目がちょっと離せなくなってきたかなという感じですかね。

Aさん：そうですね。いままではもうボケーっとしてたんですけど、赤ちゃんって感じだったんですけど、最近はどう、ちょっと夕飯作るときに目を離すだけで、こっちに戻ってこいみたいな感じで泣いて。

中本：呼ばれちゃうんですね。

Aさん：すごい呼んできて、すごいかわいくて相手しちゃうと、2歳のお兄ちゃんがやきもちで、ちょっとややこしい（笑）。母としてはすごく嬉しいんですけど、ちょっと取り合ってくれて（笑）。すごいややこしいけどかわいくて楽しいです（笑）。

中本：モテモテなんですよ（笑）。

Aさん：モテモテです。こんなにダイレクトに必要とされてくれる状況ってなかなかないじゃないですか。ちょうど、すごくしんどいの喜びを感じて、本能なのかもしれないんですけど、ボロボロになっても笑うほど嬉しいというか、ちょっと狂気じみててずっと（笑）。しんどくても嬉しいみたいな。

これらの状況を楽しいと思えるのは、これまでも何度か語られた第1子の時の経験が大きいと考えられる。

Aさん：はい。1人目のときにちょっと病んじゃって、カウンセリングの先生に診てもらったことがあったんですけど、そのときにいろいろ教えていただいた知見を生かしているのもあるかなという感じで、すべてのできごとをプラスに転化していい感じにするっていう、なんかそういうふうなうまいこと体の中で回せてる感じがします。

中本：考えてみたらね、そんなに人に必要とされるみたいな、呼ばれても嬉しい感じも確かにありますよね。

Aさん：そうですね。とにかく顔が丸くってかわいいので、どんな要求されてもやっちゃうみたいな（笑）、仕事だったら絶対、今日までって言われてももうちょっとしんどいし、なんか今日は休もうとか、たとえば休み

の日とかに、もういいか、明日までいいかなとか思うんですけど、子どもだとあの丸い顔で見られると、どんなにしんどくてもいますぐやっちゃうみたいな感じで、すごく狂ったように働くことができます (笑)。

(中略)

Aさん：優先順位が100%子どもみたいになって、本能なのかもしれないですけど、いろいろあっても、たとえば食事作っても、何しても、なんか要求されると全部やっちゃうみたいな、本能に動かされてる日々です。楽しいです。

他のインタビューでも、兄・姉の嫉妬や赤ちゃん返りはしばしば悩みの種として語られていたが、Aさんにとっては兄のやきもち自体も、楽しめているという。

Aさん：すごい苦労しますね。2歳離れるのはヤバイと聞いてたんですけど、昨日も夜中寝るときに赤ちゃんが泣き出しちゃったら、私はいつも赤ちゃんを寝かしつけしたあとに上のお兄ちゃんの寝かしつけするんですけど、赤ちゃんが泣いちゃって、お兄ちゃんを寝かしつけしてる間に赤ちゃんが泣き始めちゃって、いつもはお兄ちゃんをトントンしてしながら寝かせるんですけど、泣き始めたんで、お兄ちゃんが、私が赤ちゃんに取られる、行っちゃうと思ったみたいで、すごい力で髪の毛引っ張られて、髪の毛グワーッと引っ張られて、最初は痛い、痛いって言うんですけど、それ通り越して、もう無理みたいな、全部取れるとか思って、すごい力で引っ張って、たぶんあれは行かないでっていうアピールなんだろうなと思いつつながら。

(中略)

Aさん：もう暴力に訴えてきて殴ったりされるし噛みつかれたり、もうすごい。皮がベロッとむけるくらい噛みつかれたり。たぶん最近の、赤ちゃんがちょっと甘えん坊が始まったので、取られるっていう葛藤が、兄貴として

の葛藤があるみたいで、でも、それも含めてめちゃくちゃ面白いです、見てて (笑)。

社会の中の子育て環境自体に対しても、いままで見えていなかったことに気付いたという。

Aさん：(中略) たとえば最近よく思うのが、子ども、これ関連してるかわからないんですけど、小さい子どもがいるっていうのがどういう感覚かってわからにくい、理解されにくいなと思って、たとえば普段使っている最寄り駅とかで、海外出張とかに行くときに大きな荷物を持ってガラガラッと引くと、初めてバリアフリーじゃないことに気付くとかってよくあるじゃないですか。自分の家から空港まで、実はものすごく困難な道のりだとか、同じようにベビーカーもそうですけど、普段はスタスタ歩いてるけど、ちょっと何かハンディキャップ的なものがあると急にものすごく生きづらさを感じるみたいなことってすごい、そういうかばんとかだとすごいわかりやすい例かなと思うんですけど、それが子どもにあることに初めて気付いて。

昔、私は独身のときは、たとえばバリバリ仕事をするものだと思って、たとえば朝起きてご飯食べたらず、夜、たとえば11時ぐらいまで家帰ってこないとか、休みの日って何だろみたいな、別に月曜から日曜まで同じリズムで働くし、平日でも祝日でも別に何も関係なく、朝起きて夜中に帰ってくるという7日間がつながってるだけが365日あったんですけど、子どもが生まれて保育園の関係とかがあって、初めて祝日が多いことに気付いて、日本に、すごくしんどくて、ああ、また祝日。今月、祝日何回もある！とか、ウワー！とか。とくに土曜保育とかを最近頼むようになってるんですけど、祝日は保育がなくて、あともっとあるのが、時間外労働という考え方を初めて知りまして、たとえば入試とか学料の仕事が日曜日とかにあったり、多少仕方ないんですけど、土日にある仕事とかがあ

とものすごく困ってしまって、とくにいま0歳と2歳という最悪なコンビネーションなので(笑)。そういう意味で専業主婦の方もすごいなと思うんですけど、ただ私の場合、6時とか6時半に帰ってからの時間しかないので、もし昼間もあったらもうちょっといろいろできるかなと思うんですけど、仕事が終わって、たとえば最近ちょっと困ってるのが、夫が時間外労働がいっぱいあって、そうすると私が全部相手しなきゃいけないんですけど。

夫は少し年齢が離れていて、責任ある役職でもあるために、早く帰ったりして子育てに時間を取ることが難しい職場環境という。その小さい子供がいることと、仕事や社会との関係に自らが気づいた状況を「大きな荷物を持って歩いて初めてバリアフリーでないことに気づく」状況になぞらえている。

Aさん：(笑) それなんで、(夫は) はたから見ても0歳がいるように見えないんですよ。〇〇歳というと、もう(成人した)大人(の子供)がいるので、同僚のほかの先生たちとちょっとややこしい仕事、(中略) そういういかにもちょっと厳粛でちょっと無理って言いにくいような仕事がけっこうあると、夫以外はもうたぶん大学生の子どもだと思うんですけども、それでたとえばすごい忙しい先生がいると、夜の8時からしか空いてないとか、当たり前のように6時以降の会議を入れようとするんですね、皆さんが。なので、その人たちも、もしかしたら小学生とか中学生がいたら、やっぱり家に帰んなきゃいけないはずなので、やっぱり女性の教授がいないのが問題なのかなとも思うんですけど。(中略)でも、もちろん女性だから帰れるけど、男性は帰れないっていうのもおかしいんですけど。そのへんにさっきのかばんじゃないですけど、帰れないことに何も言いにくい雰囲気っていうのが当たり前にあるけど、私しか

感じてないんで言い出しにくくて。

この時点で、社会の中での子育てについての理解が不十分であることが、これまで見えていなかったことに言及している。そしてそれはAさんがAさんの立場で出産し、子育てする中で初めて見えてきた光景でもある。

考察

Aさんの2020年2月から2020年12月までのインタビューから、妊娠・出産・育児をめぐる約1年の経験について、確認した。

それぞれの子育ての課題に、困難を感じながらも対応する様子とともに、忍び込むコロナ禍の状況下で新たな困難の様相と、それに対応する姿が確認できた。

またAさんの場合、仕事と子育ての両立が大きな課題で、仕事上妊娠や出産、子育てがマイナスに働くのでは、という不安からそれを周囲に公表できず、身体的、精神的負担となっていた。ただ、公表すると実は受け入れてくれる環境があった、ということが明らかにもなっている。

第1子の際の、苦勞をして、精神的にもつらかった妊娠期と出産後しばらくと比較して、今回の出産・子育てを楽しみと思える要因はいくつかあり、ひとつは自身の経験に基づいた体調管理、とりわけしっかり睡眠をとること、取れる環境があったということである。また一つは前回の出産の反省もあり、またコロナ禍の影響もある中で里帰り出産をやめ、子育てと仕事の両立が理解されない環境から解放されたこと、あるいはコロナ禍の中で面会等が制限される中で入院中ゆっくりと過ごすことが可能になったりしたことがある。これは環境の違いや世代間のギャップによる困難が、コロナ禍でのコミュニケーションのありかたの変容によって緩和された側面もあると考えられる。ただそれは病院や保育所などの近接性、職場の環境、サポート体制の充実といった要素によって可能となる環境でもあった。実際に、保育園での受け入れが難しくなり、登園自粛をしていた時期には大

きな困難を感じている。また、その時期の関係の切断が長期的に見てどのように影響するのかについては未知数である。

Aさんは過去の苦しい経験自体を糧としつつ、育児を楽しむ、楽しいと思える形に変えていこうとする。たとえば上の子供の世話もしながら、そのやきもちも受け止めながら、楽しいと思える環境・状態を何とか創り出しているのである。このように現実となんとか折り合いをつけながら、ポジティブにとらえていくというたくましさはいわば首尾一貫感覚 (sense of coherence)⁹⁾につながる様相がうかがえる。コロナ禍においても、条件や環境が整えば、子育てをポジティブな経験とすることも可能な場合もあるということであろう。

またこのようなインタビュー調査で必要なことは、最後に取り上げた部分でAさんが駅までの道のりが「大きな荷物を持ってガラガラッと引くと、初めてバリアフリーじゃないことに気付く」と例えて表現したような、AさんがAさんの立場で子育てをしているからこそ見えた風景、たとえば社会の中に子育てに対する障壁がどのように配置され、埋め込まれているのかという気づきについて耳を傾け、拾い上げていくことだろう。遠回りな経路かもしれないが、子育てのしにくさという非対称性や抑圧を伴う状況において、ある立場から見えている光景を、その光景が見えていない人にも伝えていくこと、仲介することが、インタビュー調査などの質的研究が担う役割のひとつであると考えられる。そして、このようなコロナ禍といった、大きな社会変化を伴う現象の中では、上記のように語られたことを単に当事者の「ナラティブ」として扱うだけではなく、社会との接合や関係性の中で、彼ら・彼女らが何を考え、どのように行動したのか、いわば岸政彦のいう「歴史と構造」の中での「他者の合理性」¹⁰⁾について記述することが必要と考える。それが出産、子育て期の非対称性や抑圧のみならず、大きな社会変化とそれに伴う様々な現状に対して、それぞれの個人がどのように対応したかを考えることだからであり、さらには異なる立場の人を仲介することにつながると考えるからである。

2021年10月現在では、新型コロナウイルスの流行は、第5波が一応の収束を見せ、日常が戻りつつあるように感じられる。しかしほとんどの人が屋外では、また屋内でも対面的な場面や複数の人が同時にいる場合はマスクを着用することが習慣となり、規範となっているように、私たちはコロナ禍以前とはいくらか変容した社会にやってきたように感じられる。そして感染症専門医等の予測では第6派の流行が到来することが確実視されている。今後も刻々と変化する状況の中で、子育てする当事者の経験について、引き続き記述を積み重ねていきたい。

その際には様々な属性や状況 (本人の仕事の有無、夫の仕事状況、職場や通う病院の遠近、初産婦か経産婦か、移動の手段はなにか、など) の違いが経験の形成や評価にどのように影響するのか、あるいはしないのかについても記述を積み重ねていきたい

おわりに

Aさんは第1子のお産の際に里帰り出産を行い、仕事とお産・育児を両立することへの理解が乏しい環境の中でつらい経験をし、お産や子育てにネガティブな印象を持っていた。また、妊娠・お産が仕事上のハンデになるのではないかと懸念を抱いて今回の妊娠とお産を迎えていた。そのため、今回は里帰り出産をせず現在の自宅および職場近辺の病院でお産をすることにしたが、結果として非常に満足の得られるものとなっていた。それらを支えたのは、職場と病院、自宅が近接しており、また通勤等の移動も自家用車であったなどの条件であり、それらはお産や育児を楽しむものへと変えていく際のひとつの大きな要件であったと考えられる。またこれはAさん自身が過去の経験を糧として対応した結果でもあり、またコロナ禍の下で里帰り出産が困難となった、つまり歴史的・社会的な条件との接合の中で生じた経験の在り方でもある。さらには、お産した病院でのケアが満足のいくものであった、あるいは職場・仕事の関係者の対応が予想以上に妊娠・お産

に対して理解を示してくれた、ということも出産や育児をポジティブなものとしてとらえることができる基盤となっていたと思われる。ただし、コロナ禍での保育園の受け入れ状況の変化など、リスクを抱えた状態であったことも覚えておかなければならない。

一方で、「男性（父親）には一般に出産・子育て時の配慮がない」こと、そしてそれがひいては女性（母親）の負担を増加させ、追いつめていることが、Aさんがその立場になって見えてきた光景のひとつである。

Aさんの出産経験をポジティブなものとした諸条件（あるいはリスク）や、Aさんの特定の立場からの視点や光景を、具体的な文脈においてそれ以外の人や社会的なサポートを提供する側にも共有できるように仲介することが、このようなインタビューなどの質的研究の役割のひとつであると考える。

コロナ禍においても、本人の対処や、あるいは子育てを楽しめるような要件、あるいは困難と思う要因は、先のような属性や状況によって大きく異なると予想される。コロナ禍の元での困難や、そのような諸条件の違いによる社会の分断とその克服を考えるためにも、人類学的、質的な研究の立場から記述を積み重ねていくことが必要と考えている。

利益相反：開示すべき利益相反はありません。

謝辞：妊娠中、あるいは出産前後や小さなお子さんを育児中の大変な状況の中で、快く継続的にインタビューに応じてくださった皆様に感謝いたします。

付記：本論考は大阪大学 Society 5.0 実現化研究拠点支援事業 ライフデザイン・イノベーション研究拠点 保険・予防医療プロジェクト 生誕1000日見守り研究（研究代表者 木村正 大阪大学医学系研究科 産科学婦人科学講座・教授）の研究成果の一部である。

倫理的配慮

本研究は国立大学法人 大阪大学医学部附属病院 観察研究等倫理審査委員会の倫理審査承認を受け実施している（承認番号 19290 (T2) 承認年月日 2019年12月10日、変更申請承認年月日 2021年7月14日）。

注

- 1) 「大阪大学 Society 5.0 実現化研究拠点支援事業 ライフデザイン・イノベーション研究拠点・生誕1000日見守り研究」では、2019年度より大阪大学医学部附属病院・産婦人科（以下、阪大病院産婦人科）を受診する妊産婦から参加者を募り、妊娠期から出産後約2年までの1000日間にわたり経過を見守る縦断調査を行っている。その内容はウェアラブル・デバイスを装着してもらい、睡眠や活動量、食事といったパーソナル・ライフ・レコード（PLR）を取得するとともに、気分や体調などについてのアンケートに回答してもらうことによりデータを収集し、それらの解析をもとに育児困難を軽減する方法について探求するといったことである。
- 2) 医療人類学におけるナラティブ・アプローチの変遷および意義については、磯野真穂、上田みどり「〈特集論文1〉脳卒中のリスクを伝える・脳卒中のリスクと暮らす—心房細動に対する抗血栓療法の現場での医師と患者のリスクのナラティブ」『コンタクト・ゾーン』10, 2018. を参照されたい。
- 3) クラインマン、アーサー『病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学』1996 誠信書房
- 4) 同 『臨床人類学 文化の中の病者と治療者』1992 弘文堂
- 5) ロック、マーガレット『更年期—日本女性が語るローカル・バイオロジー』2005 みすず書房
- 6) 半構造化インタビュー及びナラティブ・インタビューの共通点及び相違については、道信良子『ヘルス・エスノグラフィー—医療人類学の質的アプローチ』（2020 医学書院）を参照されたい。本論の研究を含むプロジェクトの計画と

しては、半構造化インタビューとして、妊産婦および子育て中の親に対して、以下の項目を中心に話を伺った。ただし、その回答方法は自由回答式（open-ended）であり、それぞれの対象者の個別性に配慮し、より対象者が重要と思う点について、またインタビュアーがそれらの経験や文脈の中で確認する必要があると思う点について詳しく話を伺うことを心がけた。また、特に縦断的に回数を重ねてインタビューを行うにあたり、子育ての状況や困難などについてそれぞれの時期の様相を、また時間軸のなかでの経緯や変化について対象者の関心や関連付けに配慮することを心がけた。結果として、個人の経験を追う場合には子育て全般の経験およびその困難の感じられ方の中で、出来事と出来事の関係づけやその変遷、および対処を中心に聞き取ることとなり、ナラティブ・アプローチとしての性質が強くなっていった。今回の論文においては個人の経験を追うことが中心であったが、半構造化インタビューによって可能となる、様々な条件下での複数の妊産婦を比較し論じることは別の機会に試みたい。

4. インタビュー項目

(1) 妊産婦に対しての聞き取り

①妊婦に対して

年齢・職業等※

家族構成（第何子かも含め）※

調査施設（阪大病院）受診に至る経緯

医療従事者から現在の状態についてどのように説明されたか

ライフヒストリー（生き立ちや結婚、出産に至るまでの個人史）

出産に関して楽しいこと、うれしいこと

出産に関して不安なこと、大変なこと

病院や医療従事者の対応でよいと思うこと

病院や医療従事者の対応でよくないと思うこと

出産後、誰がどのような形で子育てをしていく予定か、あるいは援助を受ける予定か

現在使用しているデバイス等の使用状況、感想など

②子育て期の母親に対して

出産後の医療機関・健診等の受診の状況

現在のご自身・あるいは子どもの状況について、どのような説明を受けているか

出産で大変だったこと、困ったこと

出産でうれしかったこと、楽しかったこと

現在の子育ての状況（楽しいこと、困っていること、誰がどのように行っているか等）

病院や医療者の対応でよいと思ったこと、思うこと

病院や医療者の対応でよくないと思ったこと、思うこと

現在使用しているデバイス等の使用状況、感想など

（大阪大学医学部附属病院 観察研究等倫理審査委員会・倫理審査提出書類「妊娠期・子育て期の母体への個別インタビュー調査について」より抜粋）

7) 本インタビューを含むプロジェクト（注1参照）にて当初対象とした妊産婦は、「20歳以上の単胎妊娠の妊婦で、少なくとも妊娠中期から産後1か月健診までを大阪大学医学部附属病院で受診可能な者」である。本インタビューの対象者もその中から同意を得られ、かつスケジュール調整等でインタビュー可能な方に依頼をし、同意を得た。プロジェクトの目的が育児困難の軽減・解消であり、大学病院受診の特有の事情（一般の病院では診療困難な疾患の有無など）を前提とした対象者の選定等を行っている。また本稿では16人の対象者についての聞き取りについては「3. インタビュー調査, (1) 聞き取り結果の概要」にて概要を提示するにと

どめ、1名の対象者について経時的な経験の聞き取りを中心に報告する。複数のインタビュー対象の、属性や条件等による比較および議論の詳細な展開は別の機会に試みたい。

8) 「コロナ禍を生きる：里帰りや夫立ち会いでの出産かなわず 孤立感深める妊産婦 県など、リーフレットや相談支援」毎日新聞 2021.02.05 地方版／長野 21頁 など。

9) アントノフスキー、アロン著 山崎喜比古 吉井清子監訳『健康の謎を解くーストレス対処と健康保持のメカニズム』2001 有信堂高文社

10) 岸政彦『マンガーと手榴弾 生活史の理論』2018 勁草書房